

# WOMEN'S



# NEWS

2007 MAY

# SPORTS

# VOL.46

# FOUNDATION



ネパールで活動するバレーボール・モントリオール会  
(ダマク難民キャンプ：フォート・キシモト)

# JAPAN

Message	女性理事が増えない理由は？	三ッ谷洋子	2
インタビュー	女性に野球を身近に感じて欲しい		
	読売巨人軍「プロジェクト・ヴィーナス」		3
Opinion	高齢者体操教室に見るジェンダー・バイアス(下)	北田和美	6
Time Travel	「スポーツ」「社会」		7
Women's Sports	50回を超えた草の根普及活動「キッズじゅうどう」		
	永田千恵		8
Column	アメリカの風「女性スポーツ便り」第1回	羽石架苗	9
会員の広場	大貫映子さん 田中良子さん		10
事務局便り			11

## 女性理事が増えない理由は？

女性スポーツの発展に向けた“世界基準”として知られる「ブライトン宣言」。1994年の第1回世界女性スポーツ会議(英国・ブライトン)で決議されたものです。全10項目のうち、私が特に注目しているのが「スポーツにおけるリーダーシップ」。

「すべてのスポーツとスポーツに関する組織のリーダーシップや意思決定の場において女性は少数派である。これらの分野における責任者は、すべてのレベルにおいて、採用や能力の開発、そして人材の維持確保に特別な配慮をしながら、女性のコーチ、アドバイザー、意思決定者、役員、管理者、そしてスポーツ職員を増やす政策やプログラムを作り、またそのような機構をデザインしなければならない」(日本語訳 NPO 法人ジュース)。

IOC(国際オリンピック委員会)はこの翌年、女性初の副会長アニタ・デフランツを委員長とする女性委員会を設置しました。2000年3月の第2回IOC世界女性スポーツ会議(パリ)では、ガイドラインを示しています。

「2000年12月31日までに、意思決定権のある地位に少なくとも10%の女性を置くという目標に到達すること。(中略)2005年には20%という目標は維持し、達成を確実なものにすること」(同)。

翌2001年6月、JOC(日本オリンピック委員会)は第1回アジア女性スポーツ会議(大阪)において「ブライトン宣言」に署名しました。また、昨年5月には「2006世界女性スポーツ会議くまもと」をIWG(国際女性スポーツワーキンググループ)と共に開催し、ついに日本にも女性スポーツを応援する風が吹き始めたのではないかと内心、喜んでいました。

その成果を期待していたのが、この春に行なわれた各スポーツ団体の役員改選です。JOCはそれまで副会長に小野清子さん(日本スポーツ芸術協会会長、参議院議員)、理事に小谷実可子さん(シンクロナイズドスイミング銅メダリスト)と平松純子さん(日本スケート連盟理事)が入っており、理事25人中、女性理事は12%でした。

### 世界から取り残される 日本の古き男性社会

しかし、新理事の顔ぶれを見て落胆しました。女性副会長はゼロ。小谷さんと平松さんの2人が再選されただけで、結果として女性理事の総数は3人から2人に減っています。会長を含む全理事23人のうち、比率はわずか一桁の9%に後退してしまいました。

3年前のアテネオリンピックを覚えていますか。日本選手団の選手数は史上初めて女子が55%を占め、男子を上回りました。メダルラッシュとなった16個の金メダルのうち、過半数の9個は女子選手の活躍によるものです。

彼女たちを輩出した4団体の女性理事数はどうでしょうか。全日本柔道連盟:23人中ゼロ。日本レスリング協会:30人中ゼロ。日本陸上競技連盟:26人中2人(8%)。日本水泳連盟:23人中2人(9%)。JOCと同様、2000年末の目標値10%にも届いていません。

目標に達しない場合の対策について、前述の第2回IOC会議の決議文ではこう謳っています。「その理由の綿密な検討を行い、目標達成に向けた実行計画を作成すること」。JOCの「女性スポーツ専門委員会」には、まずこの問題を取り上げてほしいと思います。

## 女性に野球を身近に感じて欲しい 読売巨人軍「プロジェクト・ヴィーナス」スタッフの皆さん

「男性社会」のプロ野球界に、新しい動きが出てきています。新たな女性ファン開拓のために、女性の視点に立った女性たちが奮闘しています。一昨年3月、読売巨人軍の女性職員によるプロジェクトチームが発足。名づけて「プロジェクト・ヴィーナス」。企画から運営までを手掛けているスタッフの皆さんに、お話をうかがいました。(聞き手:高橋昭子)



選手とのふれ合いの場「ヴィーナス・サロン」(丸ビル:カフェease)。左2人目から林昌範選手、高橋由伸選手、高橋尚成選手(読売巨人軍ホームページより)

### 女性の視点に立ったファンづくり

— 「プロジェクト・ヴィーナス」を始めるきっかけは何だったのでしょうか。

2004年8月、球団代表に就任した清武英利が球場に女性ファンが少ないことに気づき、「女性ファンを増やすにはどうしたらよいか」「女性にも野球に関心を持ってもらうにはどうしたらよいか」と思ったのが、そもそもの始まりです。

まずは女性の意見を知りたいということで、私たち球団の女性職員が意見を求められました。意見と言われても、それまで女性ファンの視点に立ったことがなかったので、まず、東京ドーム内を回ってみることにしました。

すると、たばこの煙がとても気になったり、販売されている食べ物があまり美味しくなかったりということに初めて気づきました。それまでドーム内をゆっくりと回ったことはありませんでした。

た。気づいたことを幹部へ報告しました。

そして一昨年3月に、このプロジェクトがスタートしました。

— 具体的な内容をお聞かせください。

現在は、主にホームページ「ジャイアンツ・ヴィーナス・ネット」の運営や、様々な企画の提案などを行っています。「ヴィーナス・ネット」のコンテンツは「エクササイズ講座」「ふぉと・ぱーく」「アンケート」「女子硬式野球応援ページ」「イースタン情報」など盛りだくさんです。2軍選手の打席結果は、翌日にアップするようにしています。これは若手のPRになっています。オリジナルのグッズのネット販売もしています。

— 「プロジェクト」のオリジナルですか。

これまでのジャイアンツ・グッズは、Gのマークでチームカラーのオレンジの物ばかりでした。オリジナルロゴをつくり球場以外でも使えるもの、日常でも使えるものを考えました。ネイル

シールや爪とぎもあります。

— どんな商品が人気ですか。

好きな選手の名前や自分のイニシャルを入れられるペンダントやキーホルダーといったオリジナルグッズが人気です。若手選手の名前も入れられ、女性らしい色やデザインになっています。



「ヴィーナス・プロジェクト」の皆さん（左から野崎さん、江里口さん、蟻川さん、八巻さん、松本さん）

— アクセスも徐々に増えているようですが、手応えは感じますか。

もともと私たちは球団の事務職として仕事をしていたので、女性ファンと接する機会は全くありませんでした。ですから、当初は、何をしてもよいかわかりませんでした。

まず2軍のホームグラウンド（ジャイアンツ球場＝神奈川県川崎市）に行き、120人ほどの女性ファンに対面アンケートをしました。ここには若手選手を支え、応援し、自分が選手を育てているという意識の女性ファンが大勢、来ています。

アンケートの中に、「女性ファン同士が集えるところがほしい」という回答が多数ありました。そこで「ジャイアンツ・ヴィーナス・ネット」を立ち上げたわけです。

インターネットのサイトを通して、女性ファンの意見が直接、球団運営に反映できるようになりました。

— ファンとしては、選手と直接ふれあえる場がほしいと思うのですが、そのような機会はありますか。

「ヴィーナスサロン」を開催しています。野球場に足を運ばない人たちへのきっかけづくりとして、試合以外に女性に興味を持ってもらえるもの

として企画しました。大きなホールではなく、間近で選手を見られるレストランやカフェでトークショー等を開催するというものです。

参加者と選手との会話のキャッチボールを楽しんで、少しでも野球に興味を持っていただければと思っています。昨シーズンは女子大生、OLを対象に3回開催しました。

— 楽しそうですね。参加者の反応は。

選手の人柄に触れてもらえ、和やかな雰囲気です。全員が終始、笑顔のイベントでした。アンケートに「今度、球場に行ってみよう」と書いてくださった方がたくさんいました。参加者の中には妊婦の方もいらして、選手がその方のおなかを撫でたりしていました。普通では考えられない光景です。

— 「サロン」以外のイベントはありますか。

清武球団代表が、ドーム内のよいシートを何席か提供してくれることになり、私たちがその使い方をいくつか提案しました。

お母さんと女子高生を招待する「お母さんを連れてきてシート」と、何度か球場に来たことのある女性を対象に招待する「ごほうびシート」という企画が通りました。

### 「私たちが意見を言っている」

— 皆さんがこのプロジェクトに関わる前と後では、何か変化したことはありますか。

プロジェクトの仕事は、各自がこれまでしている業務、例えば秘書や広報とは全く異なります。企画を立てることなどありませんでしたから、最初は企画書の書き方が全くわかりませんでした。

でも企画を立て、企画書にして提出することで、自分の意見を言ってよいことに気づきました。それまでは受身の業務でしたから。

また、それまで他球団のファンサービス等、あまり気に留めていませんでしたが、プロジェクトにかかわるようになって、アマチュアスポーツや野球以外のスポーツで、どのように女性ファン獲得をしているのか、スポーツ認知をどう高めているのかに、目を向けるようになりました。

— 他に影響や変化があったことは。

野球振興室が担当していた女子硬式野球の支援を、「プロジェクト」と連携しながら展開するようになりました。これから母親になる世代、子供たちを支援することは、新たな女性ファンの開拓に結びつきます。幅広い女子野球のPRにもなります。ここからもどんどん広げたいと思います。



高橋由伸選手が優勝記念ネックレスを授与（読売巨人軍提供）

— 野球をやっている女子選手たちにとってはうれしいことですね。

具体的には、関東女子硬式野球リーグへのジャイアンツ杯の提供、ポスター作成。ネットで大会紹介もしています。表彰式に高橋由伸選手が来てくれたこともあります。（写真上）

試合結果は読売新聞の県版・地方版に掲載しています。

私たちが一方的に支援をしたり、何かを与えるのではなく、選手たちと話し合い、彼女たちの意見を聞きながら進めています。「プロジェクト」の支援が始まる前は、選手自身、女子野球を広めようという意識すらありませんでした。高校のクラスメートに女子野球の大会があることすら知られていませんでした。

— えっ、クラスメートにもですか。

大会ポスターは選手たちからの要望があって作成しました。女子高生が制服で駅へ掲示をお願いに行くと、無料で貼ってくれるそうです。大人が行ったら料金を取られるところですが。

女子野球の選手にアンケートをとったら、「教

師になって野球を広めたい」という意見がたくさんありました。何らかの形で硬式野球にずっと携わってほしいという思いが伝わってきます。

— 「プロジェクト」への周りの人たちの反応はいかがですか。

当初は、「女性たちだけでは、どうせすぐに終わってしまうだろう」という雰囲気が正直ありました。でも少しずつでも形が見えてくると、協力者も増えてきて、現在はジャイアンツの選手も協力してくれます。

また、私たちが東京ドーム内を回って女性として気になった点、例えば子供づれの女性ファンへの対応や喫煙スペースの改善など、具体的な要望が出たのは画期的だったようです。

### ファンと直接、交流できる場を

— 今後の希望や抱負はありますか。

将来はファンの皆さんと直接交流できる場を持ちたいと思っています。また、ジャイアンツ球場周辺の皆さんとも是非、交流をしたいですね。

活動がすぐに観客動員数に反映されるものではありませんが、地道な活動の積み重ねが全てにつながっていくと思います。今後もどんどん企画を出していきたいですね。

他球団でも女性ファン対象のプロジェクトが立ち上げられると聞いています。是非、意見交換会をしたいと思っています。

— お忙しい中、ありがとうございました。

「初めは何もわからなかった」といわれる皆さんですが、プロジェクトも3年目に入り、最初の不安が自信に変わってきたようです。それに何より、「プロジェクト・ヴィーナス」を心から愛する気持ちが伝わってきました。

<プロジェクト・ヴィーナス> 2005年3月、読売巨人軍の球団女性職員によってスタートしたプロジェクト。プロ野球の女性ファンの開拓・拡大、野球ファン全体の裾野を広げることを目的に活動している。スタッフの平均年齢は37歳。

### 高齢者体操教室に見るジェンダー・バイアス (下)

— スポーツ・オウエンス21の活動から —

北田和美

#### ●体で覚えたことを拭い去る難しさ

高齢者を対象とした健康づくりの指導現場では、特に男性と接して考えることが少なくありません。子どもの頃から、覚えてきた“学び”が体にしみこんでいます。

未だに富国強兵下の教育が影響していて、教育の偉大さと恐ろしさを感じるとともに、今、教育者として何をなすべきかを考えさせられました。

ここでご紹介しているのは、2005年春の大阪女子体育連盟主催「スポーツ・オウエンス21」セミナーで、健康運動実践指導士の方々の話題提供を中心に実施した内容です。

通常は、成長期の子供にかかわることが多く、生涯体育をめざして指導している体育教師にとって、「これらの現実を、子ども世代や孫世代に継続させないようにするにはどうすればよいのか」「学校教育の中で、今、大切にしておかなければならない指導のポイントはどなたのところにあるのか」を真剣に考えることが必要だと気づかされる、よい機会となりました。

#### ●希望を持って発信し続けよう

こう見てきますと、一度、刷り込まれたものはぬぐいがたく、絶望的のようにも受け取られそうですが、次のようなうれしい事例もありました。

明治生まれの親に「趣味を持つことは悪いことだ」「楽しむことや遊ぶことは罪悪だ」と育てられてきた男性が、女性指導者による「高齢者体操教室」に参加して、そのトラウマから開放され、劇的に伸びやかに生きられるようになったということです。

70歳以上の男性であっても、考えようという意思があり、理解しようとする人は変えられるという発言に、希望の光が見えました。セミナー参加者の感想は、次のようなものでした。

\*気づいている女性から発言することが重要だと感じた。

\*人としての生き方を考えさせられた。

\*ここで話が出来たことで安心した。

\*このような場に足を運ぶことが重要だと感じた。

\*私たちの世代でも、今までの刷り込みで自分自身、気づかないでしてしまったこともあり、意識の研ぎ澄ましが大切だ。

\*ここで学んだことを、自分の生活に社会にどう活かしていくのが課題である。

このような感想を聞けたということも含め、参加者による討議の中から見出せたものが、予想以上に大きかったことを、改めて感じました。

#### ●男性から見た「スポーツジェンダー」

私たち「スポーツ・オウエンス21」は、女性のスポーツ環境を向上させようという目的で活動をしています。考え方の軸足を置いているのが「ジェンダー・バイアス」(「らしさ」から生まれる偏見や先入観)です。

これまで女性の視点から社会の矛盾を考えてきましたが、男性の視点から見るとどうなのでしょう。昨年8月のセミナーでは「スポーツがしたい女性がいる一方で、スポーツをしたくない男性もいる」と主張されている仏教大学の大東貢生さんをお招きしました。テーマは「運動音痴の男の子とジェンダー」。大東さんが話された「スポーツが得意でない男の子」から見た社会の偏見は、男女の性別にとらわれない教育のあり方の大切さを痛感させるものでした。

この時のお話を受けて、今年1月のセミナーは「男らしさの社会学」からの気づきをテーマにパネルディスカッションを行いました。

「女らしさ」があれば「男らしさ」もあるわけで、これからも、身近にある事柄に目を向け、地道な発信を続けるセミナーを開講していきたいと考えています。

<きただ・かずみ> スポーツ・オウエンス21事務局担当。大阪女子短期大学助教授、大阪女子体育連盟副会長。WSFジャパン会員。

### TIME TRAVEL

WSFジャパンがスタートしたのは1981年。今から4半世紀前です。その当時は一体どんな社会だったのでしょうか。この欄では、女性スポーツと女性を取り巻く社会の話題を、当時の新聞記事から取り上げ、時代の流れに目を向けてみることにしました。

#### スポーツ

#### 男のスポーツ 女の挑戦状 それなりにルール変え

<1980年10月23日：日経新聞>



従来男だけのスポーツと考えられていたラグビー、サッカーアイスホッケーや格闘技の柔道、大きなパワーが必要なパワーリフティングやボディビルへの女性の進出が盛ん。

だが、男性と女性に体力差があることも事実。サッカーの場合、全国大会は8人制、25分ハーフで行なう。グラウンドの大きさは男子の3分の2、使用球は4号と、一回り小さくて軽いボールだ。アイスホッケーは2分の1ルール。リンクの大きさは同じだが、男子の1ピリオドが20分なのに対して10分である。

<現在は> 女性がやらないスポーツはないといっている時代となった。ルールについては、サッカーでは女子のルールは男子と同じ。アイスホッケーは4月の世界選手権(日光)では1ピリオド20分で実施。ただし、「ボディーチェックング」の反則やフルフェイスガードの着用義務等、女性ならではのルールもある。

#### 社会

#### 中野区が長期「婦人セミナー」 どう生きる“女性の時代” 希望者が殺到、抽選に

<1980年7月13日：朝日新聞>



中野区が国連婦人の十年中間年を記念して、「婦人セミナー」参加者の募集をしたところ、定員50人のところ100人を超える希望者が殺到した。

当初は男性社会に問題があるので、男性も巻き込んだ形のセミナーにすべきとの意見もあったが、それを受け入れている女性の意識改革が必要ということで、女性対象とした。全39回の講座形式となっている。

<現在は> 「婦人」という言葉は使われなくなった。中野区のホームページで「女性」を検索すると中野区男女共同参画センターの「女性の生き方なんでも相談」が出てくる。女性相談員、女性弁護士が対応している。